鶴岡市立図書館・鶴岡市郷土資料館だより

やまびこ 特別号 371号

新年に寄せて

図書館・郷土資料館長　五十嵐恭子

　あけましておめでとうございます。
市民・利用者の皆様に新しい年が穏やかで実りあるものになりますよう、職員一同願っております。
　昨年12月に「病と暮らす」と題したテーマ展示を本館エントランスで実施しました。クリスマスツリーの隣で重いテーマでしたが、病気の方がクリスマスやお正月に重い気持ちで過ごす時、図書館の本が少しでも役立てばと思いました。闘病記や治療、生活についての本のほか、気分を変えたいときにスッと読める本として展示した詩歌や絵本は思いのほか多くの方に手に取ってもらえました。そこで、新年の展示は「短歌・俳句・詩歌の世界」と題して当館所蔵資料を蔵出しします。伝統の短歌や俳句、現代詩に加え、漢詩や外国の作品まで揃えてみました。新年を迎え気分を変えてみたい方に向けて、新たな気持ちになるかもしれない、詩歌の世界をお楽しみください。

＝図書館にある「午年（馬）」関連本＝

【一般書】
- 『ひのえうま』吉川　徹(2025)
- 『うまたん』東川　篤哉(2022)
- 『うま』井上　ひさし(2022)
- 『日本の馬の仕事図鑑』青木　修(2025)
- 『浮世絵に描かれた人・馬・旅風俗』橋本　健一郎(2001)
- 『馬の世界史』本村　凌二(2001)”
- 『世界で一番美しい馬の図鑑』タムシン・ピッケラル(2017)
- 『近代日本の競馬』杉本　竜(2022)

【児童書】
- 『ウマ大図鑑』日本ウマ科学会(2013)
- 『あおいうま』ナタン・アール(2004)
- 『馬のトレーナーという仕事』工藤　ケン(2025)
- 『大研究！馬は友だち』野本　トロ(2013)
- 『嵐にいななく』L．S．マシューズ(2013)
- 『往診は馬にのって』井上　こみち(2009)

＝先月結果発表された賞＝

第５２回大佛次郎賞

受賞　『雪夢往来』　木内　昇

小説、ノンフィクション、歴史記述など幅広い分野で活躍した作家・大佛次郎の業績をたたえ、1973年に創設された。形式を問わず優れた散文作品に贈られる賞。

令和８年１月８日発行
鶴岡市立図書館・鶴岡市郷土資料館
〒997-0036
鶴岡市家中新町 14-7
（図）TEL：25-2525（郷）TEL：25-5014
FAX：25-2526

1月の新着図書　リクエスト・予約開始は 1月16日（金）です

◎小説・エッセイ
- ●グロリアソサエテ（朝井　まかて）
- ●ぎんなみ商店街の事件簿　２（井上　真偽）
- ●変な地図（雨穴）
- ●ブーズたち鳥たちわたしたち（江國　香織）
- ●鏡地獄（江戸川　乱歩）
- ●普天を我が手に　第3部（奥田　英朗）
- ●ほおずき、きゅっ（梶　よう子）
- ●高宮麻綾の退職願(城戸川りょう)
- ●猿（京極　夏彦）
- ●分裂蜂起（佐々木　譲）
- ●初雪（柴田　よしき）
- ●それはそれはよく燃えた(講談社)
- ●うらぎり長屋（高瀬　乃一）
- ●巌窟の王（友井　羊）
- ●とどけチャイコフスキー（中山　七里）
- ●メスを置け、外科医(中山祐次郎)
- ●テミスの不確かな法廷〔2〕（直島　翔）
- ●晴れの日の木馬たち（原田マハ
- ●くらやみ小学校(姫野　カオルコ)
- ●じゃあ、これは殺人ってことで（東川　篤哉）
- ●成瀬は都を駆け抜ける（宮島　未奈）
- ●雀ちょっちょ（村木　嵐）
- ●婚活食堂　14（山口　恵以子）
- ●本当のことを言おうか　1（谷川　俊太郎）
- ●リンボウ先生老いてのたのしみ（林　望）
- ●かえる生活（群　ようこ）
- ●見えない死神（東　えりか）

◎実用書
- ●学校図書館新米司書フントー記（須藤　みか）
- ●江戸の読書図鑑（飯田　泰子）
- ●その悩み、哲学者とお坊さんはこう答える(小川　仁志)
- ●13歳からの概念思考(戸谷洋志)
- ●まじないの文化史（新潟県立歴史博物館）
- ●上沼恵美子の人生笑談白黒つけましょ(上沼　恵美子)
- ●ローマを見た（稲富　裕和）
- ●ふらっとアフリカ（藤原　章生）
- ●落とされなかった原爆(鈴木裕貴)
- ●日本文化、寄り道の旅(彬子女王)
- ●山の仕事ガイドブック(松見　真宏)
- ●こども防犯BOOK（冨川　万美）
- ●素人校長ばたばた日記（川田公長）
- ●おでん学！（紀文食品おでん研究班）
- ●人間と昆虫のこれからを考える（沼田　英治）
- ●にっぽんのカモ（小宮　輝之）
- ●休養マネジメント（片野　秀樹）
- ●「謎に眠い」を解きほぐす（菅原　洋平）
- ●少食でもちゃんと栄養がとれる食べ方(関口　絢子)
- ●驚嘆の構造図鑑（斎藤　公男）
- ●衝撃的においしい豚肉レシピ（中村　奈津子）
- ●交通トラブル六法（藤吉　修崇）
- ●ごちそうシネマ（くみた　あきこ）
- ●伝わる言語化（三宅　香帆）
- ●本の話はどこまでも(青山美智子)
- ●文豪の食卓（南條　竹則）

◎児童書
- ●下積み図鑑（真山　知幸）
- ●10歳から考える伝える言葉（藤井　貴彦）
- ●リアルにヤバい犯罪増加!10代の防犯（田村装備開発株式会社）
- ●毒のある生き物と応急手当（高岡　昌江）
- ●どうぶつ好きのお仕事図鑑（今泉　忠明）
- ●小さな共生者たち（エイルサ・ワイルド）
- ●痛みって何だろう？（加藤　実）
- ●本当はスゴいばっちいもの研究所(坂井　建雄)
- ●人体の進化のなごり博物館（レイチェル・ポリクィン）
- ●お米はすごい！（柴田書店）
- ●おいしいお米をつくりたい！（谷本　雄治）
- ●グレッグのダメ日記　めちゃくちゃパーティー(ジェフ・キニー)
- ●小泉八雲の怪談（小泉　八雲）

◎絵本
- ●ボクのいろ（板垣　李光人）
- ●ゆらぴた（海野　あした）
- ●たからぶねの七ふくじん（岡田　よしたか）
- ●みょうが宿（川端　誠）
- ●きょうりゅう、なにいろ？（そく　ちょるうぉん）
- ●さよならなんかしない（佐藤　まどか）
- ●えっさほいさ（たなか　ひかる）
- ●みえないおしごと(とくなが　けい)
- ●おんぶおんぶのももんちゃん（とよた　かずひこ）
- ●もぐらけんせつ（長崎　真悟）
- ●むじな（小泉　八雲）
- ●ネムとプン（古沢　たつお）
- ●じてんしゃにのったそば（キョウ・マクレア）

やまびこ号の次回巡回日は

月　　日です

新着図書は上記以外にもありますので、お気軽にお声がけください。
新刊は、ホームページでもご覧いただけます。
http://lib.city.tsuruoka.yamagata.jp/

郷土資料館だより

２８０年前の城下に出没したクマ撃退顛末

日本漢字能力検定協会が募集している「今年の漢字」で、令和七年は「熊」が選ばれるほど、昨年はクマの出没が各地で相次ぎ、市街地まで入り込んで人を襲うという事態が頻発した。近年でも、クマが人里に下りてきたことはあったものの、人を襲うという事態には発展しなかったはずだが、たまたま次回展示「石原平右衛門家史料展」を準備していた過程で、今から280年ほど前に城下に出没したクマとの死闘を記した史料を見つけたので、時節柄でもあり、今回はそれを紹介することにする。

さて、今回紹介する史料は、国元と江戸の家老で交わされた「封印を以て申し達し候」という文言で始まる書状群であるが、この事件はすでに「古手控年訳」（「雞肋篇」巻一五九）でも紹介されているため、それぞれの不足箇所を補いながら、この一件について詳述していくことにしよう。

寛保3年（1743）9月9日の朝、七軒町の一角（現在の三和町。蓮台院から宮原病院の辺り）に現れたという。そこは大網道と呼ばれる当時の街道沿いで、平野新右衛門の住居もそこにあったが、平野の若党である理助がクマに気づき、まずは鎗で一突きする。手負いとなったクマはここから常念寺の方に向かい、さらに当時の繁華街である七日町を抜け、神楽橋を渡らず、内川を横切り、元曲師町にある石井与一右衛門家（現在の本町三丁目。遠州屋の辺り）の庭先に現れる。それから道を横断し、大瀬左太夫家（鶴岡公園南駐車場辺り）に至り、玄関先で高橋平吉の中間（ちゅうげん）某をなぎ倒している。その後、クマは二軒隣りの三矢多膳家に現れるが、この段階で最前に仕留め損ねた平野家若党理助も到着し、さらに一突きを加える。ここで加勢があり、二番鎗を突いたのは、町人の恩田清右衛門家来である嘉右衛門だったが、両人共になかなか急所に刃先を入れることは叶わず、逆に反撃を受け、クマは理助を押し倒して乗り懸り、その後、多膳の屋敷内に入り込んだという。この時、理助を救助するべく、漸く駆け付けた鳥打の足軽某が鉄砲で撃ち留めようとするも叶わず、膠着状態が続いたところ、種子島流砲術師範である中村三内（中村家も七軒町では平野家と道路を挟んだ向かい側にあった）が鉄砲を携えて到着する。三内は早速足軽を指図し、クマ包囲網を廻らせようとした矢先、突然クマが屋敷内から飛び出してくる。その時、恐らく野次馬の中にいた、櫛引通本郷組砂川村で八尺木流し（「八尺木」とは薪のこと。朝日方面から赤川・内川を通って城下に供給された）を稼業にしていた久八という人物が手に鳶口（棒の先にトビのクチバシのような鉄製の鉤をつけたもの）を振り上げ、クマに襲い懸かるも、あえなく撃退。当初は三内も鉄砲で狙っていたが、クマには隙が見つからず、仕方なく刀で斬り掛かるも、やはり仕留められず、逆に押し倒される。しかし三内、再び起きあがり、今一度斬りかかるもクマは倒れない。そうこうする内に三内の弟子の長山五郎吉駆け付け、師匠のピンチを救うべく、刀を一閃、漸くクマを仕留めることが出来たという。ちなみに、元禄5年（1692）に書かれた「元禄中武術之師」（「大泉叢誌」 巻三一所収）によれば、景流居合の師範に長山五郎右衛門とあるので、五郎吉についても居合術に秀でていたのではないかと想像できる。

翌日、大目付と徒目付が検分に来て、関係者に対して口書（いわゆる事情調書）を取ったが、この時、肝心の家主である三矢多膳はクマと対峙することなく、あろうことか、長屋の屋根に登って、この騒動には加わらなかったことが明るみに出る。これを問題視した国元の家老連中は「他人に仕留めさせ、其身長屋の上に居り候躰」と江戸家老に報ずるに至る。当時、藩主酒井忠寄は江戸にいたが、忠寄の判断も仰いだ上で、多膳は「屋敷へ熊駆込候節、武士ニ不似合臆病之仕方、不届ニ思し召され、御用人御役御取り上げ御知行三百御住石の内、半減百八十石下し置かれ閉門」という処分を命じられることになる。手負いクマが目の前にいれば、誰でも逃げ出したくなるが、当時の武家社会ではそれが許されなったワケである。なお、この時、多膳と一緒にいた大嶋小平吾と菅善三郎（この当時、菅家は三矢家の隣）についても、詳しく調査され、最初は玄関にいたものの、多膳が屋根へ駆け上る一方で、二人は見物に来た群衆に加わったことが判明したため、処分を免れることになったようだ。一方、勇敢に熊と鎗で対峙した若党理助は、その後、足軽に取り立てられたという。

最後に「古手控年訳」に書かれた、この一連の騒動に関する狂歌を紹介したい。この大騒動は、当時の口さがない人々にとっては絶好の話題になったのだろう。三矢多膳の巡りあわせの悪さには、同情を禁じを得ない。

千早振神代も聞かぬ武士(もののふ)の
から家にして皆逃るトハ
太平の御代に弓矢はなきものか
　　三矢なれども一矢でも出づ
弓腰になりて逃出る三矢との
　　駆込み熊を一矢でも射ぬ
（百八十石に減らされたことに掛けて）
熊野より九月九日に熊が来て
　　九九に合せて二九の十八

（今野　章）

図書館からのお知らせ

特別図書整理期間・図書館システム更新のため休館します

休館期間：令和8年2月2日（月）～11日（水）

・休館期間中の本の返却は、本館入口右側の返却ポストをご利用ください。
・相互貸借の（鶴岡市立図書館を通してほかの図書館から借りた）本やCD、DVD は返却ポストへ入れず開館時カウンターへご返却ください。
・分館は平常どおり開館しておりますので、ご利用ください。